

Glocal Tenri



4

月刊 **グローバル天理** Monthly Bulletin Vol.21 No.4 April 2020

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
入信するとは
／永尾教昭 1
- ・ 日本語教育と海外伝道 (21)
日本語教育でのコンピューター利用について④
／大内泰夫 2
- ・ キルケゴールで読み解く 21 世紀 (19)
「実存の三段階説」再考—実存の哲学的人間学のために
／金子 昭 3
- ・ イスラームから見た世界 (新連載)
おやさと研究所とイスラーム①
／澤井 真 4
- ・ 伝道と翻訳—受容と変容の“はざま”で— (22)
仏典翻訳の歴史とその変遷 ⑤
／成田道広 5
- ・ コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観と教への伝播— (9)
4. コロンビアにおける日本人移民の話—その4
／清水直太郎 6
- ・ 遺跡からのメッセージ (56)
弥生時代を再考する⑩ 昭和から平成へ、知名度抜群の吉野ヶ里遺跡
／桑原久男 7
- ・ ヴァチカン便り (43)
二人の法王の存在：協調か対立か
／山口英雄 8
- ・ 思案・試案・私案
「碍」の字表記問題再考 (6)
／八木三郎 9
- ・ おやさと研究所ニュース 10
2019 (令和元) 年度「教学と現代」報告 (金子昭) / 新連載執筆のねらいと執筆者の紹介 / マレーシアでイスラーム学に関する招待講演 (澤井真) / 第 329 回研究報告会 (アダム・ライオンズ) / 第 330 回研究報告会 (島田勝巳) / 「出前教学講座」申し込み受付 / 2020 年度公開教学講座の案内

巻頭言

入信するとは

おやさと研究所長 永尾教昭 *Noriaki Nagao*

私は、1984年9月、天理教ヨーロッパ出張所（在フランス。当時の呼称はパリ出張所）に赴任し、2009年3月末をもって天理教教会本部に帰任した。この間、1995年7月からは所長の任を勤めた。計約25年間の在欧生活である。その経験を通して、私なりに天理教の海外布教のあるべき姿を探ってきた。この巻頭言をかりて、そのことについて順々に述べていきたい。

その前に「海外布教」あるいは「海外伝道」という言葉である。この言葉は、「日本人が日本以外の土地で布教する」ということを定義している。天理教の場合、韓国、台湾などはすでに同邦人が布教をしているので、彼らにとったら国内布教であり、この語は適当ではない。

そうではなく、天理教を「日本の宗教」と捉えて、日本以外の地に展開している天理教の姿を「海外布教」と捉えることもできなくはないが、日本で始まったが、日本の（あるいは日本人だけの）宗教ではない。普遍的な教えである、というのが天理教の姿勢である。したがって、やはり「海外布教」という語には違和感がある。バチカンは南米の布教を海外（あるいは国外）布教とは言わないだろう。

加えて、日本以外の国での布教を特段に取り上げる必要があるのか、という疑問がある。宗教の広がりには国家や人種という枠を考慮するのは明らかにおかしい。要は目の前の人とその宗教の信者か否かが問題なのである。しかし、敢えて「海外布教」を取り上げるのは、そこには天理教の独特の制度や教理、例えば「ぢばの理」といったものがあり、どうしても国家主権という問題が絡んでくるからだ。「異文化伝道」という表現もあるが、単に文化的な差異から惹起する困難さだけではなく、法律的、距離的な問題も考えていく。

そもそも、布教とはどういうことか。字

義通りに言えば、ある宗教の教えを布く、つまり広めるということだろう。そして、それを言わば得心させてその宗教に入信させるための行動を布教と言う。

では、入信するとはどういうことか。私は、過去に神社本庁の関係者と話をした際、「神道の信者数はどれぐらいか」と問うた。それに対して、彼は「全日本人が天皇陛下の赤子であり、神道の信者です」と答えた。つまり、日本人として生まれたら、本人が意識しなくても神道の信者なのだ。

これは極端な例としても、しばしば教団側の発表する信者数と、実際の数字には大きな開きがあると言われる。例えば日本の人口と言う場合、法律に定められた届け出という「縛り」がある。役所に届け出ている人を数えればよいのであり、はっきりする。

しかし、宗教は心の問題であるから、教団側が信者だと思っても、本人が信者ではないかと思っていたり、今日信者であっても明日信仰をやめて信者でなくなるといったケースが頻繁にあるからであろう。縛りを作りようがないのである。心の有り様、つまり主観的な事柄であり、そのため客観的な調査は不可能だろう。

ただ、緩やかな縛りを作っている教団はたくさんある。キリスト教なら、周知のように洗礼という儀式があり、これを受けた人を信者としている。浄土真宗の場合、寺の護持費（寺費）を納め寺の門徒台帳に登録されたら信者となる（浄土真宗本願寺派清水寺宝林寺ウェブサイト）。大本は入信報告書に玉串料を添えて提出するように、それぞれ縛りがある。

ところが、天理教にはこの縛り、言い換えればイニシエーションと呼ばれるものがない。これが、当然ながら講といった信者共同体を組織する際のオーソライズの問題になってくる。とりわけ海外では、この問題に直面することになる。

日本語教育でのコンピューター利用について ④

学習理論や教授法

前章で天理大学の CALL 教室のことを紹介したが、使い方としては従来の LL 教室の流れを受け継いでいるように感じた。なぜそのように感じたかを具体的に話す前に学習理論や教授法について少し考えてみたい。

日本語教育も含め、一般的に語学教育では学習理論をもとにいくつかの教授法を用い、授業を行っている。オーディオリンガル法は主に文の構造を意識し、新出の名詞や助詞を習い、動詞や形容詞の活用の訓練をし、それらを繰り返し練習し、習慣形成していくやり方である。従来こうしたことは LL 教室が活用されてきた。CALL システムも同じようにモデル文を聞かせたり、シャドーイングをしたり、聞く、話すという面で訓練することができる。つまり語学の基礎的な部分で繰り返し、訓練をさせるような場面で有効的に活用できるということである。筆者は今まで、教師主導で新出の語彙と文型を積み上げるように教えて行くオーディオリンガル法で教えながら、学習者が主体的に活動していくコミュニケーションアプローチの手法も取り入れながら、授業を組み立てていくという手法を取ってきた。オーディオリンガル法のやり方だけでは不十分でコミュニケーション活動も取り入れて、インプットもしながらアウトプットもするということが大事だと考えている。しかも教師の指示によりアウトプットするのではなく、自発的に考え、自分の言葉で話す、書くなどの活動を行っていくことが、コミュニケーション力の向上につながると考えている。言い換えれば語学教育の中で「正確さ」を訓練する部分と「流暢さ」を訓練する部分があり、その「正確さ」を訓練する部分で従来の LL システムや現在の CALL システムが有効的に活用できるということである。もちろん「流暢さ」を訓練する部分で活用することも可能で、CALL 教室は教師の使い次第で無限な可能性を秘めているといえる。

協同学習でのパソコン利用

天理大学の CALL 教室で初めて説明を聞いて、LL 教室の流れを受け継いでいると感じた理由は、筆者が天理教語学院で行っていたコンピューターの語学教育への利用は CSCL (Computer Supported Collaborative Learning) というコンピューターに支援された協同学習であり、プロジェクトワークなどの学習者が協同で学習していく上でコンピューターを介在させて効果的に学んでいくというものだったからである。2000 年頃「CaLabo EX」「ムービーテレコ」などの CALL システムもまだ開発されている頃ではなく、学習活動のどの部分にコンピューターを介在させていくことが効果的なのか考えて、現実的にできることから試行錯誤を繰り返していたように思う。そんな経験があるので、初めて CALL 教室に入り説明を受け、一通り機器の説明を受けた時の印象は LL 教室の流れを受け継いでいるのだと感じたのかもしれない。2000 年頃、パソコンが普及し、インターネットも ADSL の導入でブロードバンド時代が始まり、教育にもどんどん利用しようという気運が高まりつつあったように記憶している。筆者もその頃にはパソコンが仕事にも趣味にも手放せないものになっていたが、日本語教育にどのように活用できるのか模索を続けていた。しかし自分のやっていることが正

しいのか、本当に効果があるのかなど、あまり前例がないことで、とにかく試行錯誤を繰り返すしかなかった。

ブロードバンド時代

2001 年にソフトバンク社が「Yahoo! BB」という ADSL のブロードバンド回線サービスを始め、一般にも常時接続のインターネット回線がどんどん普及した。日本語教師が個人でホームページを立ち上げるなど、情報発信する人も本格的に増えてきた。筆者もホームページを作り、情報を集めるだけでなく、自らも発信するようになった。個々の日本語教師がインターネットを介して、時間や場所を気にせず、繋がり合えるようになったと言える。現在の SNS が盛んで、ブログのように手軽にすぐ始められるという時代ではなく、ホームページ作成ソフトなどで、一からページを作っていかなければならなかったが、html の知識を学んでいくことは楽しくもあった。2002 年に『月刊日本語』のアルク社から電話があり、2003 年 1 月号で「日本語教育に IT 時代がやってきた!」の特集をやるので取材したいとのことだった。編集部の方が来られ、実際にコンピュータールームを見てもらったり、取材を受けたり、実践していることを伝えた。後に発刊されてから、他の取材を受けた日本語教育機関ではどのように活用されているのか知ることができ、とてもありがたかった。やはり自分と同じように試行錯誤しているのだと安心した面もあった。

日本語教師塾

2019 年 8 月時点では「IT (Information Technology)」という言葉も使われなくなり、代わりに「ICT (Information and Communication Technology)」という言葉がよく使われるようになった。言葉は変わっても意味するところは同じである。筆者自身は ICT というものは結局、人と人を繋ぐものであり、それを日常生活、社会生活、教育などの様々な面で活用していけば生活がさらに豊かなものになるものだと思っている。2001 年頃から始めた自分のホームページ「仮想日本語教育研究室」の中に日本語教師同士が交流する掲示板「日本語教師塾」を設置したのだが、日本語教師歴が長いベテランから初心者まで、いろいろな人が自由に書き込んで意見交換ができた。助詞の使い方の質問もあれば、テンスやアスペクトについての文法的なこと、また教室運営についてなど、個人的に授業で悩んでいることなどにアドバイスをしたり、受けたり、様々なことを話し合うことができた。日本語教師というものは、一般的に所属する教育機関で先輩の先生から教えられたやり方を習い、それが正しいと信じて、その通りに実践していくことも多いと思うが、ICT を利用することで他の教育機関の先生とも立場を気にせず意見交換することもできる。すでに当たり前のこととなっている感もあるが、当時は画期的だった。筆者も多くのことを学んだ。これはヴィゴツキーの唱える社会的構成主義の学習理論を教師同士が ICT を利用し実践していることであり、そういった環境づくりをするのに ICT は大きな可能性を持っていると言える。人と人が繋がることによって化学反応が起き、新しい発想が生まれ、新しいアプローチをすることができるのだと思う。

教科書の中のキルケゴール

哲学は大同無門で、どこから始めても何を議論しても良いと言え、確かにその通りである。しかし、せっかく哲学を学ぶ以上は、人類の先輩たちが人間や世界をめぐる諸テーマを考えてきた歴史を踏まえておくことは最小限必要なことだろう。「自ら哲学する」にしても、人類の叡知を借りてこそ意味も重みも出てくるからである。哲学思想史の存在意義もそこにある。哲学思想史はいわば哲学の歴史の見取り図のようなものだ。

この見取り図においては、哲学者とその思想は歴史の中にマッピングされる。それは昆虫の標本作りにも似た、生きた思想のカタログ化でもある。哲学倫理学史の教科書とは通常そのように編まれており、そこではある程度の暗記もまた必要悪となる。

キルケゴールは、ニーチェと並んで 19 世紀における実存哲学の先駆者として登場する。彼のモットーは「主体性は真理である」とされ、また「実存の三段階説」が紹介される。この説によれば、人間の実存的あり方は、美的実存、倫理実存、宗教実存の三段階があり、反省が深まれば段階が向上していくという。実存哲学は 20 世紀にドイツではハイデガー、ヤスパーズ、フランスではサルトル、マルセルがそれぞれの仕方次第で結実させる。こういう定番の記述の中で、キルケゴールは実存主義者と分類される。

しかし、実はキルケゴールに限らず、どの哲学思想も哲学思想史の教科書的記述に取まるものではない。それゆえ、そこから思想を本来の姿に取り戻すためには、現代日本語訳でもよいからその原著書に当たっていく必要がある。原著書に実際に当たってこそ、思想は息を吹き返すことができるのである。

実存の三段階説再考

「実存の三段階説」は、『人生行路の諸段階』における記述などを踏まえてのものであるが、それ以上にこの本の書名の印象から来るところが大きい。『人生行路の諸段階』には確かに「三つの実存領域がある」として、それらは「美的領域、倫理的領域、宗教的領域である。(中略) 美的領域は直接性の領域であり、倫理的領域は要請の領域であり……、宗教的領域は完成の領域である。」と記述されている。なるほど、実存には三段階あるように見える。また、『哲学的断片への結びとしての非学問的あとがき』では、宗教実存が内在的な宗教としての「宗教性 A」(人生への共感はあるが躓きはない)と本来のキリスト教である「宗教性 B」(信仰の殉難を求める逆説的宗教性)とに区別される。こう見れば、実存の「四段階」にもなつてこよう。

しかし、実際にはキルケゴールは段階 Stadium というより、上述した領域のほか、人生観、範囲、規定、立場、範疇(カテゴリー)、階層という語のほうを使用しているし、このような仕方での実存の段階について言及したところも少ない⁽¹⁾。いや、そもそも彼は「実存」という“哲学的用語”を生み出したわけではない。ただ、日常語として「生きる」とか「存在する」という意味の *exister* の名詞化された *Existents* という言葉を、人間のあり方に特化して用いて独自の意味を付与しただけなのである。実際、日本語訳では「生存」(白水社著作集[佐藤晃一訳])とか「実存在」(創言社著作全集[大谷長監訳])ともなっている。だから「三つの実存領域」があつて……という教科書的記述も、「人間の三

つの生き方」があつて、それは美的な生き方、倫理的な生き方、宗教的な生き方であると平易に訳し直すことができるし、そのほうが「実存」と物々しい表現を用いるよりもすっきりとする。だが、20 世紀のいわゆる Existentialismus や existentialisme に繋げるためには Existents は「実存」であるべきであり、これらの言葉も「生き方主義」ではなく、哲学用語らしく「実存主義」と呼称しなくては重みが出てこないわけである。

逆説的弁証法としての位置づけ

もう一つ注意すべきは、「三段階説」という見方である。これは明らかに「正反合」のヘーゲル流弁証法(これまたいかにも教科書的な捉え方)をモデルにしながら、しかもこれとは全く異なる逆説的弁証法を駆使するキルケゴールにも適用している節が見られる。本来は全くその弁証法的あり方が異なるにもかかわらず、「三段階説」と言ってしまうと、「実存」が美的、倫理的、宗教的な段階へと、俗流弁証法よろしくホップ、ステップ、ジャンプとランキングが上がっていく印象を与えてしまう。文章に限られた教科書的記述では、どうしてもそのような理解の限界が生じる。

『人生行路の諸段階』、『哲学的断片への結びとしての非学問的あとがき』はともに、白水社著作集ではそれぞれ三巻本、千ページ以上もある大著である。パラグラフの一片を切り貼りして紹介する方式は、キルケゴール自身が最も警戒していた理解のされ方ではなかったのか。ここは、やはりじっくりとそれぞれの本を読まなければならない。これらを丁寧に読めば、「三段階説」の扱い方も見えてくる。

三つの実存領域はそれぞれ問題をはらみながらも、きわめて実り豊かなものだ。その実り豊かさは文学的に語られることで、生き生きと読者に伝わってくる。キルケゴールは、アイロニーやユーモアという中間規定を用いて、読者の内に弁証法的な振動を引き起こそうとする。彼が仮名著者による文学形式を用いるのも、実はそこに理由がある。仮名著者もまた、それぞれの人生行路のカテゴリーなのである。

ミラン・クンデラは、文学作品における登場人物について、「人間をカテゴリーに分類することがそもそも可能であるならば、あれかこれかの全生涯に彼らを方向づける深い願いによってである⁽²⁾」と述べている。この科白をクンデラは自らの小説の中で挿話的に漏らしているが、これが最も端的に実存としての人間のあり方について示した言葉ではないだろうか。生身の人間が決してカテゴリーに分類できないのは、生きた思想がカタログ化できないのと同じことだ。読者には、これを自ら“解凍”して賦活し、自らの生き方や思想の中でこれを受け取り直すことが要求される。

人間とは精神として動的総合であり、それが人間の本来の姿である。享楽の隣には倦怠が控え、理性と懐疑は裏腹の関係にあり、信仰は絶望の深淵の中に掛かっている。人間は日々新たに自己の生を受け取り直すことで、はじめて人間すなわち精神として生きる。これが人生の逆説的弁証法の姿なのである。

[註]

- (1) 小川圭治『主体と超越』創文社、1975 年、126 頁。
- (2) ミラン・クンデラ『存在の耐えられない軽さ』(千野栄一訳) 集英社文庫、242 頁。

「イスラーム」と「イスラーム教」

私たちは、西暦6世紀に預言者ムハンマドが啓示を受けて創始された宗教を何と呼んでいるだろうか。現在、日本語では「イスラーム」、「イスラム教」、また「イスラーム教」など、複数の呼び方が並存している。必ずしも一つの呼び方でなければならないわけではないが、なぜ「イスラーム」と呼んだり、「イスラーム教」と呼んだりするのだろうか。

「イスラーム“教”」ではなく、「イスラーム」と単に表現する背景として、イスラームとは「単なる宗教」ではない、という意見がある。すなわち、イスラームは生活や経済のシステム全体に関わっているために、キリスト教的な「宗教」概念にもとづく個人的な信仰に限定されないというのである。その一方で、キリスト教や仏教と呼んでいるにもかかわらず、イスラームにだけ「教」を付けないのは不適切だという見解もある。それは、イスラームが「単なる宗教」ではないということによって、「宗教」を超えたものだという特権性を付与するからであるという。それらの妥当性はともかく、ここでは今日多くの研究者が用いている「イスラーム」という呼び方を使用したい。

おやさと研究所の創設理念

筆者が所属する天理大学おやさと研究所の前身は、昭和17(1942)年に創設された天理教亜細亜文化研究所である。この研究所が、戦前から戦後にかけてイスラームに大変注目していたことは天理教の内外でもほとんど知られていない。4月は天理大学の創立月にも当たる。連載の序に代えて、おやさと研究所のとイスラームの関わりについて、簡単に叙述しておきたい。

研究所創設の理念は、1925年に創設された天理外国語学校(現・天理大学)にまで遡る。現在にいたるまで4月23日が天理大学の創立記念日に据えられているが、この日は創設者である中山正善天理教2代真柱の誕生日である。外国語学校は、天理教の海外伝道の養成機関として設立されたが、あえて創立記念日を誕生日に据えた点に、2代真柱の並々ならぬ決意が現れている。「私の生命に代えて、外国語学校というものをみてゆきたい」という言葉に現れるように、2代真柱は自らの誕生の意味を、天理教の海外伝道に重ね合わせたのだった⁽¹⁾。

天理教亜細亜文化研究所の創設の目的は、「本研究所以国家目的ニ即応シテ亜細亜ニ於ケル民族文化ヲ調査研究シ以テ本教ノ活動ニ寄与ス」(「天理教亜細亜文化研究所規程」第二章第三条)と謳われている。研究所は、第2次世界大戦も激しさが増しつつあった時期に創設されたが、2代真柱は海外伝道を推進するうえで、伝道地についての学術的な調査研究の必要性を痛感していた。すべては天理教の海外伝道という目的の下、研究所は創設されたのである。

天理教亜細亜文化研究所の総裁には、2代真柱が就き、顧問には当時、日本の人文学を代表していた3人の研究者たちが名前を連ねた。その研究者たちとは、2代真柱の東京大学時代の師であり、日本における宗教学の草分け的存在であった姉崎正治、『広辞苑』の編者としても知られる新村出^{しんむらいつぶる}、そして2代真柱の学友で、天理語学専門学校(現天理大学)の校長も務めた古野清人である。姉崎と新村は戦前におけるキリシタン研究に関して著名な研究

者であり、古野は民族研究所(1943年創設)でアジア地域の宗教事情を担当する傍ら、『マホメット伝』(1940年)のようなイスラームに関する翻訳書も出版していた。

研究所の意図

昭和18(1943)年2月24日、2代真柱は、第1回所員会議において研究所創設の意図を次のように述べている。

今になって研究所を設けたということは、如何にも時局に便乗して出来たように見えるが、この研究所のことについては、自分としては夙に語学校の設立に於いて考えを深うし、図書館の創設に於いて、その手を染めたものと思っている。即ち、図書館の中に「日本文化研究会」を設け、語学校の中に「海外事情調査会」を設けさせ、今日まで名称や組織は違ってきたが、研究の必要を痛感し、その具現を計ってきたのは全く同じ気持からであった。更に教庁には「海外伝道部」を設け「史料集成部」を置いて来たことも、要はこの気持からであった。全てが本教伝道一世界救済に邁進すべき本教伝道上の必要に応じ、その処々に必要なる機関の一つとして設けて来たものであって見れば、これ等の諸機関は決して個々別々のものではなく、本質的に一連の連関性を持ったものであった。⁽²⁾

当時、東亜経済調査局(1908年創設)、東方文化学院(1929年創設)、さらに回教圏研究所(1938年創設)など、アジア地域を研究対象とする機関が存在していた。しかしながら、天理教亜細亜文化研究所は天理教の伝道のために創設された機関である。したがって、「研究所も唯単なる研究機関ではなくして、海外伝道に関する後方の参謀機関として始めて生命があり、海外伝道の推進力として進まねばならぬ」と、研究所が担う役割が示されていた。⁽³⁾「アジア」と呼ばれる地域を眺めたとき、戦前まで広く「回教」と呼ばれていたイスラームを無視することはできなかった。戦前の天理教の海外伝道においては、中国や東南アジアに深く根を下ろしているイスラームを理解することは、喫緊の課題だったのである。

イスラームから見た世界

この課題は今なお我々に提示された課題である。さらに、アジアにとどまらず、現代世界は、イスラームを知ることなく理解することは不可能であろう。筆者自身は宗教学を専攻するなかでイスラームに関心を抱いてきた。東南アジアや中東地域ばかりではなく、欧米諸国や日本にもモスクが建設され、ムスリム(イスラーム教徒)たちが生活している。

連載では、「イスラーム世界」を訪れた筆者が、書物からだけでは学ぶことのできない宗教的な文化や習慣に関して、宗教的にも文化的にも、「他者」だからこそ見えるイスラームの姿を描き出してみたい。イスラームの全体像に比べると、あくまで限定的な姿かもしれないが、学術的な視点と筆者の体験を織り交ぜつつ、連載を進めたいと考えている。

[註]

- (1) 「第三十七回天理大学創立記念式に於けるお話」『真柱訓話集(昭和37年度)』天理教教義及史料集成部、1963年、294頁。
- (2) 「亜細亜文化研究所第一回所員会議に於ける訓話」『管長様御訓話集(第3巻)』天理教教義及史料集成部、1944年、77頁。
- (3) 同上。

仏典翻訳の歴史とその変遷 ⑤

訳経史とその背景

後漢の時代に安世高から始まった漢訳は、北宋までの約千年間にわたり断続的に続いた。初期の頃には安息（パルティア）、月支（月氏）、康居（ソグディアナ）、龜茲（クチャ）などの中央アジア諸国出身の出家者らが中国へ渡り漢訳に従事した。当時は出身地を名字にする習慣があったので、安息の安世高や、月支の支婁迦讖、康居の康孟詳など、渡来僧の名字からその出身地がわかる。

インドから北へ向かった仏教はガンダーラを経て中央アジア諸国へとひろまり、仏典はその地域の諸言語に翻訳された。西域からの渡来僧は多くの仏典を中国にもたらし、インド諸語のみならず、西域諸語に翻訳された仏典も漢訳されるようになっていった。また、彼らが暗記していた口伝の教えも中国に伝えられ漢訳された。

中央アジアの渡来僧によってはじまった漢訳は、中国における仏教受容の礎となり、その教えが次第に受容されるにつれて、漢人仏教者らも漢訳に従事するようになっていった。約千年にわたる訳経史には数多くの訳経僧が登場する。中でも4世紀に活躍した亀茲国出身の鳩摩羅什と、7世紀に活躍した漢人の玄奘の二人は、顕著な功績を残した訳経僧として特に有名である。

訳経史は旧訳の時代と新訳の時代に大きく区分される。この二つの時代は玄奘を境にしており、玄奘より前の時代を旧訳、玄奘以降を新訳の時代と区分される。これは玄奘がそれまでの漢訳を刷新し、新たな翻訳論を打ち立てたからで、彼の翻訳はその後の東アジアの仏教に大きな影響を及ぼした。また、旧訳の時代をさらに分けて、鳩摩羅什より前の時代を古訳の時代、鳩摩羅什以降を旧訳の時代とする区分もあるが、本稿では便宜上、旧訳、新訳という時代区分をもとに紹介したい。

訳経史を理解するために、その方法論として大きく二つの視座がある。一つは、訳経僧によって漢訳された内容を分析、比較する仏典の内観という視座である。もう一つは、訳経と訳経僧の事績や翻訳事情を記した「経録」（経典目録）をもとに理解する仏典の外観という視座である。

文献学的な考察の上で、仏典の外観という視座はインドにおいては成立しえない。なぜなら、仏典を通時的に外側から把握し論述した記録がインドにおいては皆無であるからだ。しかし、中国では年号が明記された経録が作製され、それらは歴史的資料として有用である。本稿では、仏教の受容と変容の歴史を紐解くために、仏典の内観として、仏教語の漢訳の変化に注目しつつ、『出三蔵記集』という経録からその外観を理解し、訳経史の諸相を俯瞰したい。

4世紀に釈道安が編纂した『綜理衆経目録』は、後漢から西晋時代までに訳出された約639部の経典を網羅していたと伝えられているが、これは散逸し現存していないため、まとまった経典目録として6世紀初頭に編纂された『出三蔵記集』が現存最古のものとなる。これは、梁の学僧、僧祐が編纂したもので、経典名と翻訳者が列記されている。この経録には釈道安がまとめた『綜理衆経目録』の内容が多く含まれており、彼の功績を窺い知ることができる。

経録が編纂された背景には、外来の仏教を受容するために長

い時間をかけて膨大な漢訳仏典をうみだした中国仏教特有の問題が存在する。

漢訳が始まったころ、中国人にとって仏教はまだ異質のものであり、その教えを理解する基盤が整っていなかったと思われる。仏典の言葉が漢訳されたにもかかわらず、教理を全く知らない漢人にとって、訳語から未知なる教えを理解することは不可能であった。さらに、中国人の思惟方法は、老荘思想や儒教などの在来の伝統的な思想に基盤を持っており、まったく異質のインド思想をそのままの形で理解することは至難であった。インド的思惟に根差した仏教のもつ教理概念を中国人が理解するには、文化的・思想的な溝が存在していた。その溝をいかに埋めるかが中国における仏教伝播の初期段階での課題であった。これは仏教に限ったことではなく、異なった文化圏への伝道を試みる宗教においては、どの時代、どの地域であっても避けられない普遍的な問題である。

そのような状況の中で、初期には中国人への仏教宣布のために中国古来の思想をもって仏教を理解し講述する試みが行われていた。これは、煩瑣なインド的仏教の教えを、類似する老荘思想など中国の伝統的思想に基づいて理解する方法である。このような仏教理解は「格義仏教」とよばれる。この格義に関して常盤大定は「仏教を解釈するのに、老荘を以てするをいふ。之が為に仏教は仏教本来の精神を發揮せず、(中略) 仏教は寧ろ老荘思想に習合せりと見るべし。」と指摘している(常盤, 1941:4)。老荘思想に伝わる教えや術語などを用いて咀嚼、消化された中国式仏教理解は、仏教の本来の教えを歪曲あるいは変容させるものであり、インド仏教の正統解釈とは言い難い。しかし中国での仏教受容の初期段階において、特に知識階級に漢訳仏典を受容させる上で、格義仏教は便宜的手段として一定の役割を担っていたと考えられる。

また、極端な中国的仏教理解は仏典そのものにも影響し、釈迦は老子の生まれ変わりであるという荒唐無稽な内容を説く『老子化胡経』など、伝統教理にまったく根拠を持たない經典などもつくられるようになった(水野, 1990:136)。このような經典は「偽経(疑経)」とよばれ、中国における仏教受容を促すために意図的につくられた。

訳経史の背景には、様々な系統の多様な仏典がランダムに将来された中国特有の事情がある。たとえ同じ仏典であっても伝来時期により同異がままあり、非常に混乱していたようだ。それらは漢訳によってさらに複雑に交錯し、雑多な典籍群となって拡散した。

このような状況から、仏教が中国に浸透するにつれて、次第に正しい仏教理解を希求する漢人仏教者らが現れるようになった。彼らは格義仏教を排除し、その思想的枠組みからの脱却を目指した。そこでまず、上述の経録が編纂され、漢訳仏典が整理されることになった。その意図するところは、訳者や訳語、伝来時期が異なる膨大な量の仏典の情報を比較精査し、その内容吟味から高低或いは真偽を決するという非常に困難な知的操作「教判(教相判釈)」を行うことであった。

[引用文献]

常盤大定『支那仏教の研究』春秋社、1941年(第二刷)。

水野弘元『經典—その成立と展開』佼成出版社、1990年。

4. コロンビアにおける日本人移民の話—その4

天理教コロンビア出張所長
清水 直太郎 Naotaro Shimizu

コロンビアの日本人移民の締め括りの話として、彼らが日系人であることによる自己意識、また彼らの困難や苦勞についてまとめたい。

言語、文化、価値観、習慣が異なる地域・国に移住して永住するには当然のことながら、語りつくせぬ苦勞に伴う。カリの65歳になる2世の女性がこう語ってくれた。

証言8 (NB)「私は小さな村で育ちました。罵倒を浴びせられたこともあります。《中国人!》《ブタ野郎!》や、細い目、肌の色が違うことによってでしょうが、それは日本人というからではなく、現地人と異なるというところから言われたのだと思います。彼ら(現地人)は白人か黒人なのです。また、私の両親は、自分の行動に対して厳しく躰けてくれました。すなわち、私の好き勝手放題にはしませんでした。周りの人は私たちが外国人であることに對して注視していたからです。そして、人を思いやる心を持つように育てられたのです。両親は他の人々にははるばる親切だったと思います。そういう生活だったので、年月が経って他の人々は私たちに敬意を払ってくれますし、現在の状況はすこぶる良好なのです」また、三世のカリ在住の女性は次のように語る。

証言9 (NB)「私は三世なので、言葉や適応は問題ありません。ここで生まれ育ったのですから。一方、私と暮らしている祖母は未だ言葉が壁なのでしょうが、外に出たがりません。祖母が若い時代には辛い困難があったと聞きます。女性は男性と同じように農作業をしなければなりませんでしたが、同時に育児をしなければならなかったからです。」さらに、カリの一世男性はこう証言してくれた。

証言10 (NB)「コロンビアは外国人に対して寛大な国だと思いますね。それに、私たち日本人は朝から晩まで毎日、そりゃあもう働きましたよ。色んな事がありました。どうにかこうにか、私たち日系は良い特別なイメージを作り上げたのではないのでしょうか。それが今日にも役立っている気がします。」

このように、カリ・パルミラの日系人は、確かにコロンビア人社会との間に困難や不快な時期があったと言える。しかし、南部の日系の人たちはこれを努力と団結で克服した。その一方で、コロンビア北部、バランキージャの日系人の場合は、コロンビア社会との諍いは少なかったそうである。というも、彼らが少数でもあり、また配偶者がコロンビア人であったと分析することができるからである。バランキージャの75歳になる二世の男性は言う。

証言11 (NB)「決してイジメや罵倒など一切なかったね。私の記憶だと、親は言葉を知らなくて、村人の中では日本人ということで珍しがられた。ただバランキージャのような大都市に出た時、やはりからかわれたりしたけれども、全然気にならなかったよ。ある時期になると、私たち二世は何というか、恥ずかしさとか不安というか日本人移民の子孫であることのアイデンティティーを考えるとときがあるかもしれない。とはいうものの、ここバランキージャではそういう不安は誰も抱いてはいないと思う。なぜなら、コロンビアでは国籍は関係なく習慣で手厚く人を歓迎します。そういう寛大さを持っている国だし、またそれぞれの人の出生や出身というかその人たちの国に敬意を払うんですよ。」

*コロンビアの日系人と共に：これからの研究課題の入り口

今回、少数とはいえコロンビアの色々な日系人の方と話が出来たことは、大変有意義だった。またそれと同時に、もう少し体系的に、またもう少し時間をかけて調査する必要があることにも気が付いた。日本人の移民の歴史的な経過は、私が考えていたほど単純なものではないのである。

南部のバージェ移民は「農業試験移民」という使命を引き下げていた。事実その使命は果たされ、バージェ県はもとよりコロンビア全国においてもその名は知られている。

バージェ県やバランキージャのほとんどの日本人の子供や孫たち(二世〜)は現在、積極的に自分たちは日本人の子孫だということを誇り、日本人意識を持っていると私は感じた。しかしながら、この日本人意識の背景には、日本の近年の発展が存在することを忘れてはならない。歴史に「もしも」というのは存在しないだろうが、もしも日本が経済的に不況であったなら、日系人はどのように祖国の事や日本文化を見たのであろうか? 日本人という意識は保ったであろうか? 日系人という誇りは持つことができたのであろうか?

また、ここで新たな課題が浮上してきた。国民のアイデンティティーというのはどういう意義をもつのであろうか? というのは、バランキージャの日系人の場合、すでに日本人一世を知らない人々がいるし、日本文化というのを直伝してもらった経験がない。とすれば、彼らは、日本や日本人というののどのよう捉えているのだろうか?

最近、ここ数年日本へ行ったことのある日系人が増えている。彼らは日本文化を体験して、コロンビアに帰国して、文化伝承の新たなサイクルが生じてこようとしている。

インタビューの最後に語ったバランキージャの二世の55歳女性の言葉は、私の心に深く残った。

証言12 (NB)「私の身体の中の血液は100%日本人の血液です。母親は自分の行動を通して私に日本文化を見せてくれました。けれども日本語は教えてくれなかった。だから現在日本語を学んでいるのです。私はコロンビア人というより、日本人という意識を感じています。」

両親の行動によって文化を受け継ぐというのも、一つの伝承の形なのである。

*結び

日系人であることへの不安はアイデンティティーの認識不足からくるのであろう。それゆえ日系人は彼らのアイデンティティーを求めて先祖の国やその歴史・言葉を学ぶのかもしれない。

コロンビアの日系の人々は、現在の日本人が失いつつある文化の大切な点を見出していると思う。文化とはそもそも無形であり、人の行動や考え、また「徳分」の複合物であると、私は考えている。世界どこでも物質文明がはびこり、人々はモノを求めて、またモノや形のあるものしか信じなくなっている傾向がある。しかし、何十世紀も前から、我々日本人は思考、行動、信念、などの無形である文化を築き上げてきた。私は、コロンビアの日系の人たちが、きっと日本の文化の最も重要な要素を見出し、日本文化本来の姿を再発見するような気がしてならないのである。

筆者が京都の小さなアパートの一室で、そのニュースを聞いたのは、平成元年（1989年）2月23日の朝のこと。ちょうど、2月24日の大喪の礼を前に、社会全体が自粛モードで、ただならぬ雰囲気覆われている最中だった。ラジオから突然流れた考古学者、佐原真氏（奈良国立文化財研究所・当時）の声は、まるで九州で邪馬台国が見つかったかのような興奮した口ぶりで、大手の新聞も、「最大級の環濠集落発掘」、「望楼や土塁確認」、「倭人伝と対応」、「邪馬台国時代の‘クニ’」などと、吉野ヶ里遺跡の発見をトップニュースとして扱った。吉野ヶ里遺跡に関する報道は、この第一報の後も過熱気味に続き、5月7日までの一般公開期間（2ヶ月弱）には110万を超える見学者が現地を訪れ、沿道には臨時の商店が立ち並んだ。こうして‘吉野ヶ里フィーバー’とも呼ばれる社会現象がにわかに巻き起り、遺跡保存を求める署名は10万筆を数えた。この状況をみた香取熊雄・佐賀県知事は、急遽、遺跡の主要部分を国史跡として保存する方針を固め、翌平成2年（1990年）5月に国史跡に指定、さらに平成3年（1991年）4月には特別史跡に指定と続き、平成4年（1992年）には国営公園として整備されることが閣議決定された。

全国的な注目を集めたこの一連の出来事は、後日、NHKのドキュメンタリー番組「プロジェクトX～挑戦者たち～」で取り上げられ、「王が眠る神秘の遺跡～父と息子・執念の吉野ヶ里～」として、平成14年（2002年）に全国放送された。番組は、再現映像を織り込みながら、「数々の困難を乗り越え故郷の誇りを取り戻そうと、必死に大地と格闘した父子の30年に渡る情熱の物語」として構成され、発掘調査を担当した七田忠昭氏もスタジオのゲストとして出演した。吉野ヶ里遺跡は、工業団地造成のため、1986年から発掘調査が続けられ、1987年頃だったか、筆者も、列状の甕棺墓群が延々と600mにわたって見つかった発掘現場の様子を見学させてもらったことがあった。その後、調査が進み、濠や柵列の内側に物見櫓・高床建物などが立ち並ぶ「南内郭」の姿が次第に明らかになるとともに、平成元年（1989年）の年明けには、いよいよ、工事着工のために発掘調査現場を明け渡す期日が迫ってきた。当初から遺跡の全面保存を訴えてきた「佐賀の自然と文化を守る会」が1月23日、県知事、文化庁長官に陳情書を提出するが、1月25日には工事の起工式が行われ、工事着工が2月15日と決定した。NHKの番組で焦点が当てられたのは、調査担当の七田忠昭氏がブルドーザーの運転手に頼み込んで工事の着工を待ってもらい、その間に、弥生時代研究の第一人者の佐原真氏に現地を視察してもらったことで、情勢が一挙に変わり、最終的な遺跡保存に結びついたという感動的なエピソードだった。

実は、工事着工直前の2月12日、遺跡の現地に立ったのが、偶然、シンポジウムの打ち合わせのために佐賀に来ていた金関恕先生だった。邪馬台国の王国の姿を彷彿させるような遺跡の姿を目にした金関先生は、工業団地の敷地として遺跡が消滅の運命にあることを知り、奈良に戻ったその夜に、ジャーナリズムとも付き合いの深い盟友の佐原氏に遺跡の視察を勧め、上京の折には文化庁に駆け込んで、担当の技官に保存を訴えた。

「吉野ヶ里はすごい。はやく見に行きなさい。濠が二重になっていて、濠の張り出し部分には物見櫓がある。あんな素晴らしい遺跡を壊しては申し訳ない。できたら保存の方向に持って行くべきではないか」。金関先生のこの言葉を受けた佐原氏のその後の活躍はめざましく、2月22日に現地を視察し、取り囲む報道陣に遺跡の重要性を熱く語り、その映像が、翌日の全国ニュースとして配信されたのだ。金関先生の言葉がなかったら、そして、その後の佐原氏の行動がなかったら、現在の吉野ヶ里遺跡はなかったと七田忠昭氏は述懐する。

さて、吉野ヶ里を題材にしたNHKの番組「プロジェクトX」では、七田忠昭氏の亡父、忠志氏にも焦点が当てられた。七田忠志氏は、戦前には森本六爾氏が主宰した東京考古学会の同人として活躍し、戦後は、地元の神埼高校で社会の授業を担当しながら、考古学の研究を続けていた。神埼高校で七田氏の教えを受け、埋蔵文化財天理教調査団に勤務する池田保信氏によれば、木訥としたその授業の様子は、番組の再現映像のとおりだったという。昭和28年（1953年）には、吉野ヶ里遺跡北方の三津永田遺跡が、豪雨で決壊した城原川の堤防復旧工事のための土取場となり、七田氏は、工事に伴って連日多くの甕棺や人骨などが出土したことに対応した。旧知で人類学者の金関丈夫博士（九州大学医学部）に応援を求めたのがきっかけとなり、息子・金関恕先生（当時は京都大学大学院在学中）や坪井清足氏（奈良国立文化財研究所）による緊急発掘調査が行われた。平成元年（1989年）、吉野ヶ里遺跡に立った金関先生は、すぐ近くの三津永田遺跡で、工事中の崖面に露出した甕棺墓を、命綱をかけて宙づりになって調査した若き日の記憶がまざまざと蘇ったという。

七田忠志氏の遺志を継いだ息子、忠昭氏が発掘調査を担当した吉野ヶ里遺跡は、平成13年（2001年）4月、「国営吉野ヶ里歴史公園」として、環濠や建物群の一部が復元されて開園し、平成21年（2009年）2月には、環濠集落のほぼ全域が再現された。国営公園の拡充はその後も続き、環濠集落の北側に位置する甕棺墓群の整備にあたっては、未発掘の区域に設置された説明板で、天理



整備された吉野ヶ里国営歴史公園

は、1月1日～

2月16日、吉野ヶ里遺跡の史跡指定30周年を記念した特別展が開催され、知名度抜群となった遺跡のこれまでの軌跡を振り返りつつ、未来が展望された。「遺跡がただ保存されるだけでなく、その存在が現在の生活のなかで生きるよう、人々が何かを考えるきっかけになるように」という金関先生の思いは、さまざまな経緯を経て、未来へと受け継がれようとしている。

二人の法王の存在：協調か対立か

大ローマ布教所長
山口 英雄 Hideo Yamaguchi

二人の法王

2013年2月11日、前法王ベネディクト16世は法王を辞職する意向を示した。そして翌月13日、アルゼンチン人のベルゴリオ（現フランチェスコ）が後継者として選出された。前法王は、ヴァチカンの聖ペトロ教会の裏にある元修道院の建物で生活することになった。その場所は現法王の住まいから、わずか500メートルしか離れていない。前法王は現法王に対して、一切口出ししないこと、つまり院政をしないことを宣言した。

現法王フランチェスコは庶民的な性格で、水曜日の一般謁見、日曜日の正午の講話を通して、一般市民の心を掴み、信頼度を高めてきた。その一方で、ヴァチカン内の勢力を二つに割ってしまった趣がある。法王はヴァチカンで大改革しようと動いているが、その前に立ちはだかっているのが、改革反対派の勢力である。すなわち、守旧派の存在だ。

昨年（2019年）のシノド会議では、ブラジルの「アマゾン地域の教会」が取り上げられた。アマゾンの密林地帯の中にも教会はいくつかあるが、それを預かって指導する司祭がいなくなってきた。カトリックでは聖職者になるという人そのものが減少傾向にある。しかし、教えは世界に広まっているのだ。世界には非常に不便なところもある。アマゾンでは司祭になる人がおらず、そのために現法王は臨時的処置として、既婚者を司祭として登用したのだ。カトリックでは、聖職者は結婚できない。このことが、守旧派からの総攻撃を受けるような形になったのである。

また2020年1月、前法王は、枢機卿でギニア人のロベルト・サラールと共著の形で『我々の心の奥底から』という本を刊行する予定だった。そのフランス語版は、一足先に発売が開始された。その直前に、ヴァチカン上層部はその本の発行を知り、前法王側に中止を求めていた。これを受けて、前法王も自分の名前と写真を取り下げることにした。しかしそれは間に合わなかった。

前法王には、次のような思いがあった。法王辞任当時、自分は余命いくばくもないと思っていたが、思いのほか長生きしてしまい、カトリックの現状の動きを見て自分の意見を発信してもおかしくないと考えたのだ。そこへ、サラール枢機卿が本を刊行するというので、相談に乗り、知恵も貸し、持論もその中に入れてもらった。サラール枢機卿と前法王との仲立ち、交渉役をしたのは前法王の秘書官であり、現在も前法王の身の回りの世話にあたっているドイツ人大司教のゲオルグ・ゲンスヴァインであった。

本の出版が近づいた時に、前法王の関与が明るみになり、現法王フランチェスコ側から次のような批判が寄せられた。法王というのは聖ペトロの後継者である。法王の言動を導くのは聖霊である。そこで、前法王は発行される本から、自らの名前と写真を削除することを決めたのだ。ともあれ、今後の教会運営において、このことが大きなしこりを残したのは事実である。

これら一連の出来事の後、前法王とサラール枢機卿の間を取り持った大司教ゲンスヴァインはヴァチカンの諸役から退いた。

大司教は本年（2020年）に入ってから、公衆の面前には現れていない。法王フランチェスコはこの大司教を左遷したのではないかと見られている。

雨乞い

地球温暖化による異常気象はイタリアにも大きな影響を与えている。昨年12月から本年2月にかけて降雨量が著しく減った。特に顕著なのがシチリア島だ。昨年は北部で雨が少なく、イタリア最長の川であるポー川の水量が非常に少なかった。昨年は春によく雨が降ったので、昨夏の水不足は起きなかったが、本年はシチリアを中心に雨が少なく、イタリア各地の土地でひび割れを起こしている。イタリアで一番高い山、火山であるシチリア島のエトナ山は海拔3,323メートルあるが、今年は雪もない。これから春から夏にかけて、恵みの雨を頼むばかりになっている。シチリア島での今冬の平均気温は、今までの平均気温と比べると1.65度上昇している。雨は昨年の12月から本年2月にかけて、非常に少なく、例年のわずか3パーセントしか降っていない。イタリア半島最南端のバシリカータのダムの水位はこの30年で最低となった。サルデニア島では冬にもかかわらず、気温は27度を記録したこともある。気温が高いために、あちこちで自然火災が発生している。

シチリア全島では、雨乞いのための祈りの行進が続いている。庶民だけの行進では望みは叶わず、今では教会にも頼んでいる。2月23日の日曜日には、ニッセーノという町の教会には600余人が集って、雨を願う祈禱を行い、その後皆で唱和しながら街を練り歩いた。そこへ隣町からの信者たちも寄り集って十字架を掲げて行進した。彼らは、農業の守護聖者アントニオ・アバーテの像も持ち出してまで練り歩いていた。カーリーニという町のアゴニザンティ教会、パレルモ県のシベッリーナ、ポッジョレアーレでも、パドヴァの守護神であり雨の守護神でもある聖者アントニオの名前を呼びながら行進が行われた。

法王ピオ12世の書類公開

法王ピオ12世は1876年にローマで生まれ、本名はエウジェニオ・パチェッリという。1930年から前法王ピオ11世の筆頭秘書を務めていた。そして、ピオ11世の死去とともに、1939年3月2日に法王に選出され、ピオ12世と名乗った。時はイタリアのファシズム、ドイツのナチズムの時代であった。同年9月には、第2次世界大戦が勃発した。

しかしながら、ピオ12世には法王としての立場からの戦争についての発言、ムッソリーニやヒトラーに関する発言はほとんど無かった。また、「ショアー」と呼ばれるアウシュビッツへのユダヤ人収容にも沈黙していた。そのために、1958年の彼の死後、今日に至るまでさまざまな批判がなされている。そのピオ12世がしたためた手紙、書類、メモや記録類が、彼がローマ法王に選ばれた日を記念して、法王選出後81年の今年3月2日に一般公開された。収集された1,600万枚の書類、15,000以上の封筒、1939年から1958年にかけての2,500あまりの冊子などがあり、それらを整理して、一般公開するのに13年かかった。もしかしたら、これにより、ピオ12世に関して新しい事実が出てくるかもしれない。

「碍」の字表記問題再考（6）

前号では「養老律令」における障害者の表記を繰々検証したが、「障碍」の記述は確認することができなかった。表記されていたのは、障害の程度を示す「残疾」「癱疾」「篤疾」や個々の障害を表す「一目盲」「兩耳聾」「手無二指」「癲狂」などの表記であった。

今回は、近代国家として歩みをスタートさせた明治時代の法律では障害者の表記をどのように表していたのかを見ることにしたい。

学制

約300年続いた江戸時代に終焉を告げ、新たな時代をスタートさせた明治政府が国家の目標に掲げたのが「富国強兵」と「殖産興業」である。その背景には欧米列強のわが国への進出に対する対応策であり、文明開化と称して「脱亜入欧」「和魂洋才」などを主眼とする思想のもとに積極的に国民に啓蒙し、国家の富強を図ったのである。

その一つが全国の教育を統轄し、国民への教育の普及を目的とした1872年（明治5）の「学制」の制定である。

学制はわが国最初の近代学校制度を定めた教育法令である。内容は109章から構成されている。「大中小学区ノ事」「学校ノ事」「教員ノ事」「生徒及試業ノ事」「海外留学生規則ノ事」「学費ノ事」など6項目を規定し、全国を学区に分けてそれぞれ大・中・小学校・小学校を設置しようとするものである。国民はみな身分・性別に関係なく、おしなべて学べることを目指したのである。

この学制は明治政府の教育の宣言ともいえるべきものである。学問の意味を明らかにし、武士の時代からの学問観を否定するものであった。明治政府が打ち出した新たな時代に即応する人材育成の教育制度である。制度の体系としては小学校、中学校、大・中・小学校の三段階に分かれており、小学校は上等と下等とに分けて各4年間とし、計8年制のものとした。とりわけ、小学校は学校制度の基礎となる教育を施す機関であり、すべての者が入学しなければならない学校として位置づけられた。その学制のなかに次のような記述がある。

第二十九章 中学ハ小学ヲ経タル生徒ニ普通ノ学科ヲ教ル所ナリ分チ上下二等トス二等ノ外工業学校商業学校通弁学校農業学校諸民学校アリ此外廢人学校アルヘシ。

中学校は小学校を経た者に対して普通の学科を教える所で2等に分ける。中学校のほかに工業、商業、通弁、農業学校もあり。このほかには廢人学校もありと記されている。この廢人学校というのが今でいう特別支援学校のことである。この学制では障害児のことを廢人という言葉で表していたようである。学制の条文のなかでは、障害児に関する記述はこの部分のみである。

特殊教育

1878年（明治11）にわが国最初の盲学校、聾学校である京都盲啞院が設立されている。その背景となったのが、盲聾教育の先駆者といわれる山尾庸三が1871年（明治4）に「盲啞学校ヲ創立セラレンコトヲ乞フノ書」を太政官に提出したことによる。そして、翌年に制定された学制において、国民すべてが初等教育（小学校）で就学するものと定められたのである。それが、学制の第29章に記された「廢人学校アルヘシ」という文言である。ここにわが国最初の特殊教育に関する規定が明記されたのである。

盲聾教育に関する当時の考え方を知る文書が種々残されている。1866年（慶応2）に薩摩藩英仏留学生として派遣された森有礼は『航魯紀行』のなかで次のように述べている。

朝飯後聾啞院を見る。師匠分之一人ドマスという人迎に出て、院中の事、聾啞人教育の仕方を初め、諸部屋までも残りなく見聞ニ備ヘシ。一体此聾啞人教育の方といふものハ、実ニ丁寧なるものなり。皆手術也。たとへハ、エの字は大指を定め、ピの字は指を以てピの形をつくり、如期して式拾六文字を手指を以てつくり定めて、万事万物通せずという事無し。奇哉奇哉奇哉。此院生男女当時八拾人位と聞けり。初めわれ此等の件を日本ニおひて聞しかと、嘗て信せさりき。今現然之を覩て感驚殆と記シ難し。

ここでは聾啞人と表記し、その教育方法について見聞した事柄を記している。

また、1867年（慶応3）4月20日の『中外新聞』では「明治初年における盲・聾教育の提案」という題目の記事で当時の特殊教育の考え方を著している。

凡国富まざれば万民離散国力疲弊し、兵強からざれば賊徒蜂起敵国すさまを窺ふの患あるべし。先ず富国強兵を欲せば農には賦を薄くし武役を除き……盲目の者は西洋の如く傍人をして読書講釈を聞かしめ字石を木に凸刻し指頭にて摩擦して知らしむべし。聾者指頭を以て眼に更ふ可く、聾者口眼を以て事を脩む可く、聾者耳目を以て業を営む可く、而して後工夫を凝らし多く便利なる新器械を造りだすべし。……兵卒は山伏、僧侶、博徒に軍学調煉を教へたらば討伐の助ともなるべし。新聞紙は諸州に其局を建てて、何に寄らず忌諱無く広く世に行はれん事を欲す。如何となれば四民共に万国の事勢を亮察し上下の情を通ずる是より善きは無し。是れ富国強兵要務の大略なり。

ここでは、盲目の者、聾者、聾者という表現である。この記事を書いた平井元次郎は富国強兵のもとになすべきことは「農工商の保護」「議会制度の創設・兵制の改革」、そして「盲・聾教育の必要性」を説いたのである。特殊教育に対するこうした考えのもとにわが国の盲聾教育がスタートすることになったのである。

小学校令

学制の制定後、教育法令は教育令、学校令と変遷していくが、1900年（明治33）の小学校令で次のように障害児の表記を用いている。

第五章 就学

第三十三条 学齡兒童癲癩白痴又ハ不具癱疾ノ為就学スルコト能ハスト認メタルトキハ市町村長ハ監督官庁ノ認可ヲ受ケ学齡兒童保護者ノ義務ヲ免除スルコトヲ得。

ここでは、癲癩（精神疾患）、白痴（重度の知的障害）、不具（身体障害）、癱疾（中度の身体障害）の言葉で個々の障害を表現している。癲癩、白痴、不具は現在では不適當用語とみなされ目にすることはない。

今回検証した明治時代の教育関係法令に関しても、それぞれ個別の障害を表す用語が使用されており、障碍の表記は確認できなかった。

[参考資料]

藤本文朗ほか『京都障害者歴史散歩』文理閣、1994年。
岡本稲丸『近代盲聾教育の成立と発展—古河太四郎の生涯から』日本放送出版協会、1997年。

2019年度「教学と現代」報告 「佐藤『元の理』学の世界」

金子 昭

2月25日、天理大学研究棟第1会議室を会場に、今年度の「教学と現代」が開催された。今回は、おやさと研究所研究員である佐藤孝則教授の「最終講義」を兼ねて、これまでの「元の理」研究の成果を示す「佐藤『元の理』学」をテーマとして取り上げた。

新型コロナウイルス感染拡大が伝えられる中であったが、小学生からお年寄りまで合計82名の参加者があり、皆、最後まで熱心に聴講した。参加者には全員、マスク着用と手指のアルコール消毒に協力していただいた。

堀内みどり主任の開会挨拶、担当者の金子による趣旨説明の後、佐藤研究員が『元の理』の自然科学的考察と今日的意義と題して講演を行った。講演内容は次の4つの柱からなるものであった。

1. 「元の理」研究の背景

佐藤研究員は、それまで11年間勤務していた帯広百年記念館から1993年4月におやさと研究所に赴任し、今年で27年目を迎える。この間、天理大学や天理教第二専修科などで生物学・環境学に関わる講義を行い、また専門分野である両生類生態学・環境教育学・宗教的環境論の研究に従事してきた。さらにまた、NPO法人環境市民ネットワーク天理の理事長を務め、実践活動として天理市内外で環境保全活動を実施してきた。

こうした多彩な活動を回顧しながら、天理教の教えの根幹である「元の理」を自然科学の視点から研究するに至った経緯を説明。佐藤研究員は、天理教学研究が生物学・環境学の講義や研究と交わる焦点が「元の理」の普遍化であると捉え、これが最終的に目指す目標になると述べた。

2. 「元の理」の動物学的考察

佐藤研究員は、自分の研究を「元の理」の動物学と位置付ける。ここでは、「元はじまりの話」に登場する、神名を授けられた10種類の水域棲生物を学術的に同定する考察が行われた。それぞれの動物について、「こふき」本からその名称や姿かたちの描写を集約し、『和漢三才図絵』などの叙述や図絵などを参照しながら、実在のものであれ架空のものであれ、実際にどの水域棲生物が該当するか、綿密な精査を行った。

「うを」は「魚」のことではなく、当時「ぎぎよ」と呼ばれた「サンショウウオ」であり、「み」は「白蛇」で「水蛇」である「スナヤツメ」であると、佐藤研究員は同定。サンショウウオやスナヤツメは、田圃に数多く生息していた「ドジョウ」とほぼ同じ大きさであるが、当時の大和地方でも希少な生物であり、「どろ海中を見澄まされると、沢山のどぢよの中に、うをとみとが混ざっている」という『天理教教典』第3章「元の理」の叙述に符合する。また、「しやち」は実在のシャチではなく、架空の生物である「魚虎（しゃちほこ）」であると指摘。その他、「かめ」、「うなぎ」、「かいらい」、「くろぐつな」、「ふぐ」についてもそれぞれ同定を行った。

上記の動物たちが人間創造の「道具・雛型」として比較的サイズが小さく、具体的で身近な生き物であるのに対して、月日

親神であるくにとこたちのみこと、をもたりのみことが取る姿の「大龍」と「大蛇」は別格であり、どちらも巨大な存在である。佐藤研究員は毒蛇への畏怖心が龍の姿と重ね合わせられ、さらにこれを大きくしたものが「大龍」ではないかと推測。また「龍蛇信仰」と呼ばれるように、龍と蛇は不可分の関係であり、「大蛇」もその文脈の中で理解することができると説明した。

3. 「十全の守護」の自然科学的解釈

ここでは、上記の動物学的考察の成果を踏まえて、10種類の水域棲生物の「性」（性質・特性）から導き出される親神の「十全の守護」について、自然科学的な解釈が行われた。いざなぎのみことの神名を与えられた「男雛型」である「うを」に、「男一の道具・骨つっぱり」の守護の理を有する「月よみのみこと」（姿は「しやち」）を仕込んだ意味合い、またいざなみのみことの神名を与えられた「女雛型」である「み」に「女一の道具・皮つなぎ」の守護の理を有する「くにさづちのみこと」（姿は「かめ」）に仕込んだことの意味合いをはじめ、佐藤研究員は「十全の守護」について、それぞれに対応する10種類の水域棲生物の「性」を踏まえて読み解く試みを行った。

4. 「元の理」の今日的意義

佐藤研究員は、発生と進化の関係性を定式化した発生砂時計（ファイロタイプ）モデルを紹介しながら、「虫、鳥、畜類」など「八千八度の生まれ更り」を進化史的に評価し、その中でもとくに「皮つなぎの道具」としての「かめ」と脊椎動物の基本設計との関係について述べた。また、世界の分布状況から類推される「うを」（サンショウウオ）の再評価についても説明。これらの話の中で、日本における進化論の受容状況やサンショウウオ研究の最先端の成果についても披露した。そして親神による「火水風」の守護の側面から、環境問題に対する解決策が見いだされると結論づけた。

佐藤研究員の講演内容の主要部分は、「2. 『元の理』の動物学的考察」と「3. 『十全の守護』の自然科学的解釈」に当てられた。

佐藤研究員は当初の予定を超え、2時間にわたって熱演。多くの教友は、この講演を通じて「元の理」の動物学の立ち上がる場面に居合わせる思いであった。質疑応答の部でも、佐藤研究員は丁寧に応答した。この後、環境市民ネットワーク天理を代表して、本学の谷口直子准教授（生涯教育専攻）より花束が贈呈された。

最後に永尾教昭所長より閉会挨拶があり、講師を囲んで記念撮影が行われた。

なお、今回の講演内容の2つ目と3つ目の柱の部分は、『元初まりの話』に登場する動物たちと題して、『グローバル天理』2015年4月号～2019年4月号まで断続的に39回連載されている。ウェブPDF版も出ているので、詳細についてはそちらをご覧ください。



佐藤孝則教授を囲んで

新連載執筆のねらいと執筆者紹介

「イスラームから見た世界」

澤井 真

イスラームという宗教は、多くの日本人にとってはほとんど馴染みがない。しかしながら、現代世界はイスラームやムスリム（イスラーム教徒）を抜きにして理解できなくなっている。一つの事象に対する捉え方も、信仰者による語りと研究者による説明ではしばしば見解が異なる。連載では、イスラーム研究という学術的な視点のみならず、筆者の友人や知人のムスリムの声も拾い集めながら、イスラームを少しずつ紐解いていくことをめざしたい。

澤井 真（さわい まこと）

天理大学おやさと研究所講師。天理大学人間学部宗教学科を卒業後、東北大学大学院修士課程（宗教学）へ進学。カイロ・アメリカン大学大学院修士課程（イスラーム学専攻）を修了後、東北大学大学院博士課程（宗教学）を修了。2015年から2018年まで日本学術振興会特別研究員PD。イェール大学宗教学科、およびハーバード大学世界宗教研究所の客員研究員、関西大学文学部、および東京大学大学院の非常勤講師、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科研究員を経て、2019年4月より現職。専門は天理教学、宗教学、イスラーム思想研究。

マレーシアでイスラーム学に関する招待講演

澤井 真

2月20日～21日、マレーシア・イスラーム青年運動（ABIM）からの招聘を受けて、マレーシアの首都クアラルンプールでイスラーム学に関する4つの講演を行った。今回の企画は、国際交流基金クアラルンプール（The Japan Foundation Kuala Lumpur）からの助成を受けており、東南アジア出身の若いムスリムたちが、日本を訪れて日本人との文化交流を図るTAMU（Talking with MUslims）プログラムの、いわばマレーシア版として初めて実施された。主催者であるABIMは、マレーシア国内でも大きな影響力を有するイスラーム団体である。

筆者が招聘された理由は、マレーシア国際イスラーム大学でイスラーム研究のために1年留学していたこと、宗教学を専攻する若手のイスラーム研究者であることによるものであった。そのため、国際交流基金クアラルンプールからは、日本の文化や宗教状況などを踏まえた、イスラームとの比較宗教学的な講演を要望された。4つの講演はすべて英語で行った。それらのタイトルはそれぞれ「イスラームの死生観」、「イスラーム研究と現代世界—展望と課題」、「日本におけるイスラーム研究史」、そして「人類のための慈悲—イブン・アラビーをめぐって」であった。講演の合間には、イスラーム系のシンクタンク（IDE）や、マレーシア・イスラーム青年運動（ABIM）が運営する宗教学校を表敬訪問した。日本の宗教状況ばかりではなく、天理教の教義や信仰をイスラームと比較しながら討議を展開した。

第329回研究報告会（1月22日）

天理教と社会福祉：宗教と社会貢献を考える

アダム・ライオンズ

京都アメリカ大学コンソーシアム／天理大学大学院研究員

天理養徳院は明治43年（1910年）に設立された。それ以来、天理教による児童福祉活動が100年以上の歴史を持ち、現在、天理教里親連盟が全国的に活動している。この里親活動が児童相談所と連携し、制度化されている。また昔からある「住み込み」という共同生活のパターンもある。住み込みは、教会で修行を行うために来る者もいれば、助けを求めに来る者もいるという点からみれば、2つのパターンに分けられるであろう。本発表では、まず、英語圏における学術的な天理教研究に関して、昨今出版された天理教に関する英語の研究書が少ないことを確認した。そのうえで、資料やインタビューを元にして、天理教里親活動と住み込みの習慣の繋がりについて考えたうえで、公式（official）の記録では掬いとすることができない、非公式（unofficial）な里親活動についても注目することの重要性を指摘した。現代における宗教の公共性を踏まえるとき、要保護児童を助けて育てることは、天理教の教義と実践から生まれた宗教の社会貢献の一つの代表的事例であると言えるであろう。

第330回研究報告会（2月28日）

「神の存在証明」の手法としての「実証主義」

—中山正善2代真柱における「無媒介の結合」をめぐって—

島田勝巳

本発表では、中山正善2代真柱の教学思想をめぐって、「教義確定のための作業」と「近代科学的科学主義」が「無媒介に結合」しているとする島蘭進の論点を戦略的に受け入れ、「特異な実証的教学の構造」と言われるその思想の特質をあらためて照射した。

まず、恩師姉崎正治の影響については、その人格主義的宗祖論に対する中山正善の「密やかな抵抗」の可能性を示唆した。さらに、最初期の『「神」「月日」及び「をや」について』から既に導出されていた「月日のやしろ」としての教祖像を基底としつつ、「おふでさき用字考」や「外冊の研究」における、徹底して教祖の真筆を重視するその姿勢に、いわば「教祖の身体の痕跡」を見出そうとする、ある種の「神の存在証明」としての含意を指摘した。最後に、客観性を確実性の要件とみなす近代歴史学の認識手続きそのものが、実はこうした中山正善の教学思想との親和性を持っていたことを指摘した。

「出前教学講座」申し込み受付

おやさと研究所では、「出前教学講座」についてのご依頼を受け付けております。どのようなことでも、気軽にご相談ください。お待ちしております。

詳細は、担当者佐藤孝則（電話：0743-63-8105、またはメール：tasato@sta.tenri-u.ac.jp）までお問い合わせ下さい。

天理大学おやさと研究所

2020 年度公開教学講座

信仰に生きる 『逸話篇』 に学ぶ (6)

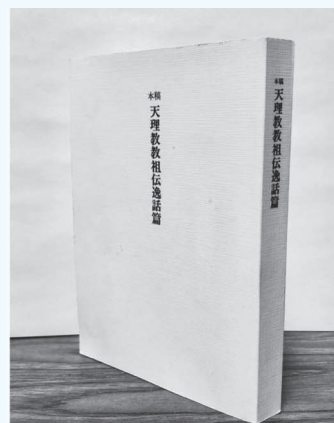
【開催趣旨】

教祖のご在世時、道の先人たちは教祖から直接聞いたお言葉をしっかりと心に治め、生涯、自ら信仰を生きる心の指針としました。そうした教祖の逸話は、世代を超えて語り伝えられ、お道の信仰の支えになっています。

この公開教学講座では、『稿本天理教教祖伝逸話篇』における教祖の逸話を手がかりとして、お道の信仰世界の一端を明らかにしたい思います。

本講座は、2020年4月から11月(7、8月を除く)の毎月25日、午前10時から11時30分にかけて、道友社6階ホールで開催します。

- 第1回： 4月25日(土)
永尾教昭所長 75「これが天理や」
- 第2回： 5月25日(月)
佐藤孝則研究員 77「栗の節句」
- 第3回： 6月25日(木)
岡田正彦研究員 88「危ないところを」
- 第4回： 9月25日(金)
澤井真研究員 93「八町四方」
- 第5回： 10月25日(日)
八木三郎研究員 106「蔭膳」
- 第6回： 11月25日(水)
堀内みどり主任 103「間違いのないように」



場所：天理教道友社6階ホール

時間：午前10時～11時30分

*お車でのご来場はご遠慮下さい。

グローバル天理

第21巻 第4号 (通巻244号)

2020年(令和2年)4月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 永尾教昭

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan